

インタープリテイションとボランティアガイド

前田 真之

(沖縄県立博物館)

Interpretation and Volunteer Guide

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract : How to inform the visitors of the significance of the museum exhibits was seriously discussed at the 40th General Conference of Museums Symposium, held by the Japan Association of Museums.

We regret that we have little experience of the interpretation in Japan. So it is necessary for the Japanese Museums to learn from America.

I introduced the practices of interpretation used in America.

The first is the historical background of why interpretation is so highly valued in America.

The Second is interpretive techniques, otherwise known as Guided Discovery in America.

Finally I showed the interpretive techniques that were introduced into the Okinawa Prefectural Museum to explain the museum exhibits, a Folding Screen related to the bird's eye view of Shuri and the Naha area.

[はじめに]

近年、博物館のありかたをめぐって、様々な論議が成されている。^(注1)

第40回全国博物館大会におけるシンポジウム「新しい世紀をめざす博物館」において提起された問題点を整理してみると、これから解決すべき方向が明らかになると同時に全国の博物館では一体これらの問題に対して、どのように取り組んできたのかという問い

掛けにもなると思われる所以、紹介しておくことにする。

- 1 展示内容と展示見学者とのギャップをどのように解決するのか：展示の対象は高校生以上であるが、実際の入館者は、小中高生が80%以上を占めるという現実。
- 2 博物館へのリピーターを如何にふやしていくか。
- 3 見る展示から社会のニーズにあった参加型の博物館活動への転換をどう図るか。
- 4 知的アミューズメントセンターとして博物館が活動するためには、教育活動をどのように組織化していけばよいのか。
- 5 大会の4テーマ（①人々は博物館に何を求めているのか、②人々に好まれる博物館環境は、③博物館にどのような人が来るのか、どのような人が来ないのか、④博物館が社会の理解を得るために何をすれば良いのか）を前提にして考えたとき博物館の調査・研究はどうあるべきか。
- 6 ボランティアの組織づくりをどうすすめていくのか。

本稿では、上述した1、2、3、4、6の課題と関連して、“展示内容を来館者に分かりやすくしていくためにどのような方法があるのか、またそのためにボランティアの解説指導をどのように進めていけば良いのか”という観点から、アメリカで学んだこと、沖縄県立博物館で実践してきたことについて述べていきたい。

インタープリテイションとは何か

インターパリテイション（Interpretation）という言葉の意味を、ランダムハウス英和大辞典で調べてみると「1 説明、解明 2（他人の芸術作品・創作などの意味の）解説、解釈 3（他人の言動に対する）考え方、解釈、理解 4 解釈の方法、解釈のしかた 5（劇、音楽などで、その意味を表わすための、または自己の解釈を示すための）役作り、演出、演奏 6 通訳」

とある。

しかし博物館学でいうインターパリテイションが、上のどちらの内容に該当するのか、また上に出てきた訳語で十分対応できるものなのか確認するためにも、エドワード P. アレクサンダーの「ミュージアムズ イン モーションズ」で触れているインターパリテイションについて述べておきたい。

彼は、はじめに「インターパリティング アウト ヘリティジ」の著者フリーマン ティルデンのインターパリテイションに関する定義を紹介している。

フリーマンは、「インターパリテイションは、事実に基づく情報と単に対話することよ

りも、むしろ直接体験や説明に役立つメディアにより、オリジナルの博物館資料の使用に関し、その意味とつながりを明らかにしようとする教育活動である」と定義する。^(注2)

そしてアレクサンダーは、この定義に、良いインターパリテイションの場合は、次の5つの要素が付け加えられると述べている。

良いインターパリテイションとは「1 真実を教え、意味を明らかにし、理解をもたらすもの……2 オリジナルの資料に基づくもの……3 科学的、歴史的調査に基づくもの……4 五感を活用するもの……5 クラスのような形をとらず、自発的でかつ来館者の関心にのみ基づき、しばしば楽しんだり対応ができるようなインフォーマルの教育である。」^(注3)

ティルデンやアレクサンダーが定義したものをもとに整理してみると「インターパリテイションとは、科学的歴史的調査に基づきながら、博物館資料に関して、五感を活用してその意味やつながりを明らかにし、理解させる教育普及活動」ということになる。

この定義をもとにランダムハウスに述べられた意味を、もう一度確かめてみると、2の解説、解釈という言葉が最も近い意味になるのだが、しかしこれは上にのべた教育普及活動の一部ではあっても、インターパリテイションの意味全体を十分に反映したものにはなっていない。そのためあえて訳語をつけずインターパリテイションという言葉をそのまま使うことにする。

インターパリテイションの活動にはどんなものがあるのか

アレクサンダーによれば、インターパリテイションの活動として、①オリエンテイション、②ツアーや③体験活動、④講演、フォーラム、セミナー、⑤出版、⑥映画およびテレビジョン、⑦広報活動およびミュージアムショップのための博物館資料の商品化、⑧若者向けの活動（クラブ、ボランティア活動）が具体的なものとして挙げられている。^(注4)

ここに列挙された活動例を見ていくと、アレクサンダーが述べているものは日本でいう教育普及活動とほぼ変わらないことが分かってくる。沖縄県立博物館の場合、「1、博物館文化講座の開催、2、移動博物館の開催、3、ワークシートの作成事業、4、観覧者への展示解説、5、児童生徒団体見学、6、展示室学習の事前打ち合わせ、7、夏休み「歩く・見る・作る」教室の開催、8、団体見学者へのビデオサービス、9、ポスター・博物館案内リーフレット・博物館だより等の編集・発行、10、博物館事業のマスコミ等への広報活動、11、友の会への指導や援助」が教育普及活動の事例として挙げられるが、これらの活動は多少の差はあるが、ほとんどの博物館で取り組んできていることである。^(注5)

こうなると敢えてインターパリテイションという訳語を使わず、教育普及活動という言

葉で説明した方が良いのではとの疑問が生じてくるのだが、アメリカで、この活動が博物館のありかたをめぐる歴史的変遷の中でクローズアップされてきたことを考慮するならば、日本での活動と区別する意味でもインテリテイションという訳語で説明していくほうが良いと思われる。

そこでアメリカではなぜインテリテイションが重要視されるようになってきたのか、その歴史的背景について述べておきたい。

アレクサンダーによれば、「アメリカの19世紀の典型的な博物館は、博物館資料や標本のみを強調する、来館者にとって静的、閉鎖的な場所であった。そこは死んだように静まり、徽臭く、来館者は小さく話すことさえ控えなければならないように感じていた。^(注6)」しかし这样的な状況に対して、教育やインテリテイションの多彩なプログラムによる挑戦が始まり、20世紀の後半世紀からは貧困層や障害者、エスニックあるいはマイノリティーグループなどの新しい来館者にも手をさしのべる動きが生じてきたと述べている。^(注7)マイノリティーによる博物館活動批判を紹介しておく。

1. ギルマン対ダナの美術館論争：この論争は、当時ニューアーク博物館の創設者でかつ館長をしていたジョン・コットン・ダナとボストン博物館のセクレタリのベンジャミン・アイブス・ギルマンとの間で行われた。

論争の焦点は、美術館の活動の中心が、美の鑑賞にあるのかそれとも社会的な役割にあるのかということであった。

ギルマンが「ミュージアムの目的は、人々のモラルを高め、審美眼をみがくことではなければならない。ミュージアムは、本来 文化的機関であり、ただ二次的に学習の場があるにすぎない。」と述べ、展示のみで十分であるとしているのに対して、ダナは「美術活動の本来の重要性は、思想と情報の伝達者たることである。その活動は、審美的な対象に関するよりも社会的なドキュメントに関するものとみなされってきた。ミュージアムの使命は、教育することすなわち情報や思想を人々に伝達することにある。ミュージアムは、文明の財産であり、したがって資料を保存するだけではなく、資料の持つ意味を人々に伝えていくべきである。」^(注8)と述べ、実習プログラム（Apprenticeship Program）という形でインテリテイションの活動を実践していった。

この論争が契機となり、アメリカの多くの博物館指導者がダナが主張した教育重視の方向すなわちインテリテイションの活動を実践する方向に進んでいくことになるが、さらにこれに拍車をかけたのが、戦闘果敢なマイノリティーたちにより

1960年代後半に行われた“地域と博物館との在り方”をめぐる博物館活動批判であった。

2. マイノリティーによる博物館活動批判：アメリカのマイノリティグループが博物館活動の在り方をめぐって行動をおこし始めたのは、1960年代の後半であった。この時期は、アメリカがベトナム戦争と関わりを持つようになった政治の季節であり、その影響が博物館の方にも影を落としていく。やがてアメリカの博物館では、これまでの反省をふまえ、教育を重視し地域との連携を深めていくが、博物館資料そのものの存在は否定しないという形で収束されていく。

革命的美術労働者連合による博物館批判：1969年にブルックリンのMUSEで行われた地域博物館(Neighborhood Museum)のためのセミナーは、マイノリティグループの行動に影響をあたえた。このセミナーでは、これまでの博物館の在り方が批判され、白人のつくった博物館への挑戦が明らかにされた。美術ゲリラ行動グループのジョン・ヘンドリックスは「問題は、白人の文化を貧者へ強制することではなく、白人のエリートによる干渉を受けず、自らの直接的な利益につながるような貧者の文化承認の道を見つけることである。」^(註9)と述べ、さらに博物館資料やスタッフの市内施設への分散化を要求している。

同じく1969年には、反対グループから構成される革命的美術労働者連合が、博物館資料を売却して、その費用をすべての人種に分け与え、ヴィエトナム戦争が終わるまでは博物館を閉鎖せよとの戦術を取っている。メトロポリタンでは、黒人グループがピケを張り、常設展の10の絵画に傷をつけたりする事件が起きている。そしてこのような事件は、1970年代にアメリカの幾つかの場所で起きている。

このような動きが博物館をカルチャーセンター化、すなわち博物館資料を処分し、イベントを中心にする方向をもたらすが、やがてはインターパリティションの活動を取り入れ、マイノリティーの意向をも十分反映するが、博物館資料の存在そのものは博物館にとって欠かせぬものであるとの形で収束していく。

アメリカでおきた博物館活動批判は、博物館がマイノリティーに対してどんなことをしてきたのかという問い合わせから始まるが、やがてはその改善の方向としてインターパリティションの活動を取りいれ、地域に開かれた博物館をめざすようになっていく。

アメリカのインターパリティションの活動に何を学ぶか：発見に向かわせる解説

アメリカのインターパリティションの活動は、沖縄県立博物館を含め日本の博物館での

活動と比べると大差がないように思える。しかしその内容をこまかに見ていくと、まだまだ参考になる事例が多く見られる。ここでは、解説に関連するアメリカの資料を紹介し、そこに何を学ぶのかを明らかにしていく。

1. マクドナルドの箱の 50 の見方－柔軟思考の実践－：アメリカでは、“どうすれば来館者に博物館資料を理解させることができるのか”という見地から、研究や活動が盛んに行われている。その代表的な事例として、ブルックリンの MUSE の活動を取り上げてみると、そこでは、プラネタリウムショー、生きた動物の用意、見て触れる展示、科学や工芸の実験や実演、人形ショー、音楽、ダンス、映画、コレクションの借用制度、子供と大人のためのワークショップ（扱うのは、人類学、天文学、解剖学、ダンス、写真、美術、詩、消費者教育、性教育、薬物乱用、航空、創作活動、映画、スピーチ、音楽その他）などの多彩なインターパリテイションの活動が行われている。一つの博物館のなかでの活動（注10）は、MUSE に代表されるが、これを時間の軸でアメリカ全土を通して見ていくと、1970 年代の子供博物館の増加、1980 年代に増加する既存の博物館でのディスカバリー・ルーム（再発見ルーム）の設置という大きな流れがあることがわかる。子供博物館やディスカバリー・ルームのねらいとするところは、五感を利用した活動や体験で、それはインターパリテイションの活動の重要性を物語っている。

しかしここでは、インターパリテイションの活動のうちアメリカの多くの博物館で行われているドゥストン（ボランティア）の解説について述べていきたい。

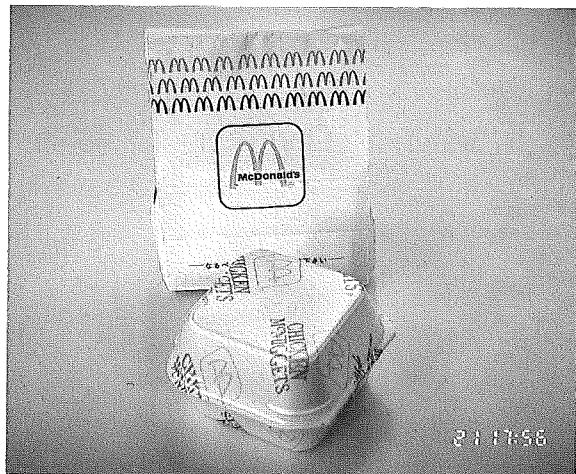
アメリカでの解説に対する考え方は、来館者が多様であれば、解説もそれに応じて多様でなければならないということである。グリンダーとマコイの共著「The Good Guide」では、解説を大きく①講義型、②質問型、③発見型の三つに分けていて、日本の多くの博物館で解説のために準備されている解説シナリオは、この分類でいけば①の講義型になる。（注11）

この講義型は、限られた時間内で博物館資料のことについて知りたいときには有効である。しかしこの解説は、相手が高等学校の生徒や大人のように、博物館資料に関しある程度知識を有するものの場合には有効であるが、対象が小学生であったり、既存の知識がないものにとっては不十分なものとなる。

そこで①で対応できない来館者には、②の対話型や③の発見型で対応することになるが、②や③の対応を考えるときに参考になるのが、「マクドナルドの箱の 50 の見方－柔軟思考の実践－」である。（注12）

ここではマクドナルドの箱が博物館資料として設定され、この箱についてどれだけの質問づくりができるのか 50 の質問づくりが紹介されている。この質問づくりの意義は、一

つの資料に関してこれだけの多くの質問を考えることができ、それを通して来館者の頭の中に博物館資料に関する具体的なイメージを定着させていくことができるということである。



マクドナルドの箱を使っての質問づくり
(50 Ways to look at a Big Mac Box)

- 1) 句いをかいでみよう。
- 2) マクドナルドの味見をしてみよう。
- 3) 全体のようすは?
- 4) 人気は?
- 5) 箱の大きさ、高さ、重さ、長さは?
- 6) 形、色は?
- 7) マクドナルドと分かるように相手に説明してみよう。
- 8) なぜこのサイズになったの?
- 9) マクドナルドの箱は、みな同じサイズ?
- 10) マクドナルドの箱のサイズは変わってきたの?
- 11) 箱の形は、どのような形に決まったの、作る方法は、箱の機能は?
- 12) なぜ箱の色は白ではないの?
- 13) 箱の飾りには、どんな役目が?
- 14) 書かれていることは、何を伝えているの
- 15) シンボル、ロゴマーク、トレードマークは、社会的にみて大切?
- 16) ビッグマックという名前は、今の時代をどれだけ反映?
- 17) 丸く囲まれたRは、何を表わしているの?
- 18) この箱造りのために、どんな材料を使っている?

- 19) この材料のために、どんな原料が使われたの？
- 20) これは再利用された資源？
- 21) 再利用は、現代社会における資源保護について何を物語っているの？
- 22) なぜこの材料がえらばれたの？
- 23) この材料の長所と短所は？
- 24) もし木や陶器のような材料が使わっていたらどうなった？
- 25) あなたは箱を見て、それから箱がどのように作られたのかの文をみて何を学びますか？
- 26) 製造のどの段階で文字が印刷されたと思いますか？
- 27) あなたは、製造過程を見たことがありますか？
- 28) 箱は良くデザインされていると思いますか？
- 29) デザインされた目的にかなうよう使われているとおもいますか？
- 30) デザインは、どれだけ改善できると思いますか？
- 31) 20年、50年、100年前にハンバーガーの包装紙をデザインしたとすれば、どのように違ったものを作れたかな？
- 32) 20年、50年、100年前、人はハンバーガーを食べていたかな？
- 33) 将来ハンバーガーの箱はどうなるの？
- 34) 箱のそこにある数字は何？
- 35) 箱のそこにある数字は、どこでつくられたのかの手掛かりになりうるか？
- 36) 箱はどこで作られた？
- 37) 箱に変わるものに何がある？
- 38) なぜハンバーガーは、平たいプレートに置かないの？
- 39) マックの箱は、それを使う人に何を物語るの？
- 40) 10分以内でマックについて、皆に説明してみよう。どれだけの人が、マックだと理解できなかったのかな？
- 41) マクドナルドへのこのような反応をカリフォルニアやオーストラリアのペースなどで得られますか？
- 42) マクドナルドの本部はどこにありますか？
- 43) あなたは、休みを必要としていますか？
- 44) 北アメリカでは、毎日どれだけの箱が使われていますか？
- 45) ひとつひとつの箱は、実際に何日使えるの？
- 46) 使われた後どうなるの？
- 47) ビッグマックの箱が、なぜ歩道や芝生、ビーチで見られるの？

48) この箱をリサイクルして活用できるものがあるの？

49) このマックの箱にかわるものがあるの？

50) ビッグマックの箱の一番の意義は何だと思いますか？

そして今、あなたがビッグマックの箱になったとして、箱になったあなたのストーリーを書いてみよう。

上で紹介した質問の内容を見ていくと50問のうち観察して答えられるものが7問で、残りの43問は自分で推測しさらに実際に調べてみないと分からぬるものである。質問は観察を出発点とするが、博物館資料を見る視点を与えながら自分でさらに調べ発見させる方向につなぐ形になっている。

2. 国立アメリカ歴史博物館歴史伝承室パンフレットの解説：国立アメリカ歴史博物館には、パブリック プログラムという教育普及活動を担当する部署がある。国立アメリカ歴史博物館の発行する内部資料「スタッフ オリエンテイション ブック」^(注13)によると、パブリック プログラム課の仕事は「一般の方のみならず特別の来館者のために、博物館展示を補ったり解釈したりする多彩なプログラムや実演を支援、調整すること」と説明している。

この部署にはさらに教育課が置かれ、ここではボランティアによるガイドがスムーズにいくようガイド教育を施したり、ボランティア活動の調整をしたり、さらに歴史伝承室（体験室）の管理運営を行っている。

この歴史伝承室には、主に次のような学芸資料が置かれている。

モールス信号機／ラバの馬具の取り付け／アメリカの初期のミシン／ユダヤの旅商人の商品／汽車内の郵便振り分け所／綿選別機／黒人奴隸の使ったうすと労働歌／アメリカ18世紀のベストとドレス／自転車／アメリカインディアンの桶／メキシカンの作った椅子／拡大切手／土の家（ソドハウス）／バッファローの皮に描いた絵／ナバホインディアンの織り／

この歴史伝承室の学芸資料は、一人で試すことができるよう作られている。しかし一人で試していて分からぬことがあったりするときのために、それぞれの資料にはパンフレットの解説が置かれている。

ここでは歴史伝承室に張り付けられた大きな写真パネル、“土の家（ソドハウス）”に関するパンフレットを紹介し、その内容の検討を通して解説のありかたを見ていくことにす

る。表紙のタイトルは、"クラムさんに会おう：再発見！ クラムさんのソドハウスづくり"となっていて、見出しの疑問文とそのあとに説明が続く形になっている。



国立アメリカ歴史博物館 歴史伝承室（ハンズ オン ヒストリールーム）
(photographs on "Sod House", National Museum of American History)

- 1) クラムさんは、どのようにして家を作ったのかな？
(ヒント：あなたの右側にあるケースの土を見てごらん)
- 2) 土のかたまりは、どのように並べたのかな？ どちらの面が上に向いているの？
(ケースの中の土を見てごらん！)
- 3) 土のかたまりを何が支えているの？
- 4) クラムさんの家の体重は？
(ヒント：土のひとかたまりは、およそ50パウンド)
- 5) 壁の厚さは、どうなっているの？
(ヒント：土ひとかたまりの幅は、12~18インチで二つ並べる)
- 6) 壁の形どこか違うところ気付いたかな？
- 7) 窓を見てごらん！ 二つの窓はどうして隣あっているの？
- 8) 窓のうえのとこ、どうして隙間があるの？
- 9) ケースの中の土、どこか変わっていない？
- 10) クラムさんは、家にどんな飾り付けをしたの？

11) クラムさんの飼っているペットは?

ここに紹介した見出しが、すべて疑問文の形になっている。このねらいは、写真を何となく漠然とした気持ちで見がちな来館者に、疑問文による投げかけを通して“厳しい中西部の開拓者のくらしを具体的にイメージ化させよう”ということにある。

この1~11までの見出しのうち、パネルの具体的な観察をとおして理解できるものは、1、2、3、6、9、10、11の7つで、残りの4、5、7、8の4つは観察したものをもとに推測が必要なものあるいは自分で調べてみないと分からぬものである。

これらの質問は、具体的な観察を出発点とするが、推測を要するものも取り入れ、推測を要するものについては自分で調べていく余地を残しながら全体像の具体的なイメージ化に迫る発見型の形を取っている。

3. 発見に向かわせる解説: 上で述べてきた「マクドナルドの箱の見方」や「土の家」のパンフレットから、我々が何を学ぶことができるのかが重要な課題となってくる。

我々が学ぶ必要のあるものを結論として述べるならば、“博物館資料そのものに目をむけさせ、自分から進んで博物館資料に迫っていかせるような解説の手法”を学ぶことが、いかに大切であるかということである。

このような解説の手法を学ぶことができれば、解説シナリオを暗記して活動にあたってきたこれまでのボランティアに対し、来館者への対応の多様さと解説の創意工夫の楽しさを教えてくれるであろう。

沖縄県立博物館での実践：発見に向かわせる解説の導入

1. 博物館ボランティアへの解説指導の経緯: 沖縄県立博物館では、平成5年7月に「沖縄県立博物館ボランティア活動実施要項」を施行し、さらに県の生涯学習振興課と協力しながら7月から9月までのボランティア養成講座と毎月第2水曜日の解説勉強会を進めてきた。

ボランティア養成講座では、「学び続けるということ」、「歴史展示の見方」、「いまなぜ博物館か」、「アメリカの博物館ボランティア」、「コレクションの収集と管理」、「わたしのつくる解説コース」、「解説体験学習」の講座を用意し、その中から14名のボランティア登録者（教育ボランティア11名、資料収集ボランティア3名）が誕生した。

この14名が、現在 解説を中心としたボランティア活動を実施中だが、そのかたわら次年度に登録希望するものも含めて月に1回の解説勉強会を行っている。

解説ボランティアの中には、解説の仕事はシナリオを暗唱して来館者に対応するものとの印象があったため、解説へのためらいが強かった。そのため来館者への対応の多様さと解説の創意工夫の楽しさを会得させていくことが、解説勉強会では必要になってきた。勉強会では、観察をとおしてコレクションに目を向けさせ発見に向かわせる方法を習得されること、さらに操作や体験、調べ学習などをとおして学習スタイルを身に付けさせ、分からぬことが生じた場合でも自分で十分対応できるようにすることをねらいとしてきた。

平成5年度の予定は、①マクドナルドの箱の質問作り、②マクドナルドの質問づくりの応用編：歴史展示室にある「首里那霸港図」の屏風を使っての質問づくり－観察に目をむけさせる方法の習得、③「首里那霸港図」の屏風の調べ学習：皆でつくった質問をもとに、今度は自分たちで調べてみる、④竿ばかりの質問づくり、⑤竿ばかりの操作をとおしての調べ学習、⑥南風原文化センターの観察（活動理念／ユニークな展示企画が生まれるプロセス／展示のストーリー構成／教育普及活動／これからの課題）、⑦機織り機の操作をとおしての質問づくり、⑧展示室の織物を調べる、⑨漂着物をとおして学ぶ社会の変遷である。

2. 導入としてのマクドナルドの箱の質問づくり：登録ボランティアの方には、1993年10月5日の解説勉強会で、マクドナルドの箱を使っての質問づくりを試みてもらった。下に挙げる質問は、ボランティアが試みたものだが、さきに紹介したアメリカでのマクドナルドの箱に関する50の質問と比べてみるとおもしろい。

- 1) どんな材料で箱は作られているの？
- 2) なぜそんな形になったの？
- 3) そのまま温めても使えるかな？
- 4) この模様は、何を表わしているのかな？
- 5) 何回でも使えるのかな？
- 6) どうして丸型ではないの？
- 7) 地球にやさしい材料かな？
- 8) なぜこんな材料を選んだの？
- 9) 実際の大きさは、どうなっているの？
- 10) ほかに転用できるかな？
- 11) 前から同じ形だったのか、それとも変わってきたのだろうか？
- 12) 重さは？

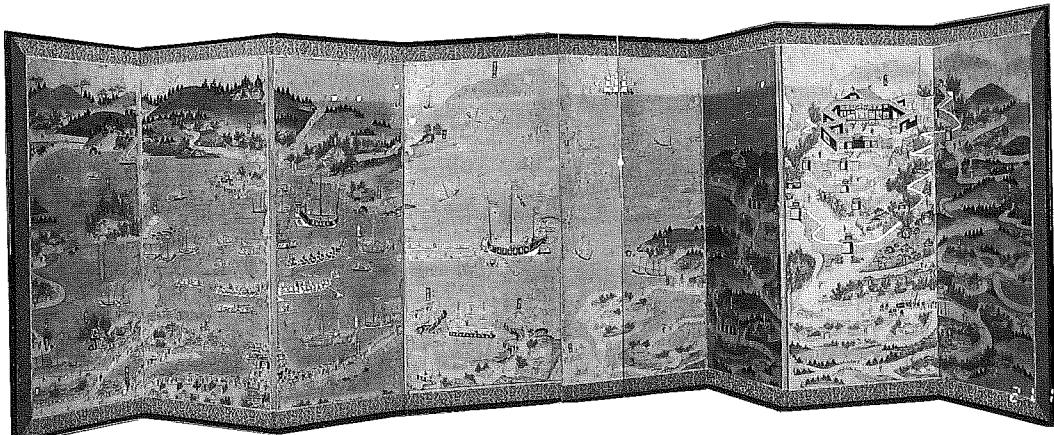
- 13) 容量を計るものとして使えるか？
- 14) マクドナルドの箱は、モスバーガーとどこが違うか？
- 15) 紙と比べてどんな利点があるのか？
- 16)マイナス何度まで持ちこたえられるか？
- 17) レンジでは、何度まで持ちこたえられるか？
- 18) この箱にいれた時、おいしそうに見えるか？
- 19) ふたを閉める穴は便利かどうか？
- 20) 箱の色は、なぜ白にしないのか？
- 21) 箱1個あたりの単価は？
- 22) 店で食べる人にとって便利か？
- 23) なぜ箱には、ラージサイズがないのか？
- 24) いっぺんにたくさんマックを買ったときでも、ひとつずつ箱詰めがよいのか？
- 25) 箱はしっかり閉まるかな？
- 26) 箱の模様は、何を表わしているの？
- 27) この箱は、どこで作っているの？
- 28) この箱は、ハンバーガーの種類に関係なく、どれでも入るのか？
- 29) 組み立て式で、一つの紙で出来ているのか？
- 30) 一箱つくるのに何分かかるか？
- 31) 世界中どこでも同じ箱を使っているのか？
- 32) ハンバーガーの値段は、国によって違うのか？
- 33) ハンバーガーの値段は、国によって違うのか？
- 34) 一年で一番売れる時期は？
- 35) 売り上げの変動は、季節によってあるのか？
- 36) 中身の材料は、どうなっているのか？
- 37) この箱を将来変えるつもりがあるのか？
- 38) 箱に入れて、味の変化はないのか？
- 39) 保温の機能もあるのか？
- 40) ポイ捨てで困ることはないのか？
- 41) この箱にして売れるようになったということがあるのか？
- 42) どういう年齢が、ハンバーガーを好むか？
- 43) 一日で売れる時間帯は？

この質問をアメリカのものと比べて見ると、その内容が具体的でわかりやすく、さらに質問を作っていくなかで、関心が箱のみならず箱の中身の方や経営戦略的な方向にまで広

がり、発見へと向かっていることが分かってくる。自分たちで作った質問を出し合うなかで、自分の見落としていたところに気付き、広い観点から新たに調べてみようという発見意欲が出てきている。

3. 「首里那霸港図」の屏風の質問づくり：マクドナルドの箱の質問づくりの応用編

マクドナルドの箱の質問づくりをとおして、一つの博物館資料をとおしてその背後にあら多くのことを学ぶ方法が分かってきたので、11月10日の解説勉強会では歴史展示室にある首里那霸港図の屏風を使って質問づくりに挑戦してもらった。いわばマクドナルドの応用編ということになる。ここでのもう一つのねらいは、こまかく観察する力を持つことである。なぜなら子供たちが見学にきたとき、こまかく観察する力があれば、解説の手法とあいまって、単なる知識注入的な解説に終わらせらず発見させる方向に子供たちを向かわせることができるようになるからである。



沖縄県立博物館所蔵「首里、那霸港図」
(Folding Screen, related to bird's view of Shuri and Naha area)

1. なぜ琉球で大名列らしきものが出てくるのか？
2. 首里城ではなく中山城と書いてあるが、なぜだろう？
3. 首里城の歓会門の前に獅子らしきものが向かいあっているが、ほんとにあったのだろうか、また向きは正しいのだろうか？
4. 社蘭という名前は、今のどこにあたるのか？
5. 海は、現在の松川あたりまで入り込んでいたのだろうか？
6. 首里城内の広さや標高は、どうなっているのだろう？
7. 外国の船らしきものに白、青、赤の三色旗があるが、どこの船だろう？
8. 描かれている船は、何種類あるのかな？
9. 船に乗っている人の服装は、どんなかっこうをしているの？

10. 那覇の海のむこうに描かれている垣花は、島だったのかな？
11. ハーリーの服の色が、白、黒、水色だが、正しいか？
12. Oの中に十とかいた旗があるが、何を表しているのかな？
13. 屋根つきの船は、何に使われていたのかな？
14. 地にいる人達の服装には、違いがあるのかな？
15. 沖の寺とかいてあるのは、今もあるのかな？
16. 三重城とかかないで新重城と書いているが、どちらが正しいか？
17. 白っぽい斜めの線が海の近くまでできているが、何だろう？
18. 港で傘をさしている人が多いが、その当時傘の使用は広まっていたのだろうか？
19. 和船が、なぜ沖縄にあったのだろう？
20. 動物で描かれているのは牛だけだが、馬などのほかの動物が描かれていないのには何か理由があったのだろうか？
21. 山に描かれている樹木から、屏風を描いたときの季節が分かるだろうか？

ボランティアの方が次々と質問を出し合っていくなかで、さらに新しい疑問も生じてきた。“那覇の港にはハーリーの船や黒船、進貢船、薩摩の船、山原船などが同時に描かれているが、こんなことが現実に起こり得たのだろうか？”という疑問であり、その疑問から派生してさらに“もしこういうことが現実に起こり得なかつたら、この屏風を描いた人は、この屏風で何を表したかったのかなあ”という疑問が出てきている。

いったん疑問が明らかになってくると、ボランティアの調べる意欲は高まり、発見へとむかっていく。このときに調べ方の方法を学芸員から指導していったので、ボランティアは学習スタイルが次第に分かり、解説学習の見通しが立てられるようになってきている。^(註14)

単なる知識注入に終わらせらず、一つのコレクションを対象にした質問づくりの方法を学ばせ、さらに調べ学習のスタイルを身につけさせれば、ボランティアが自分自身も磨きながら、子供たちを発見に導く喜びを体得できるようになると確信している。

4. これからの課題：インタープリテイションといわれる活動の中で、ボランティアの解説にのみ絞って述べてきたが、これからもっと検討しなければいけない課題もある。

一つのコレクションについて多くの質問づくりを試みたが、来館者に投げかける質問は、この中から精選し、さらにその順序や構成だけを工夫していかなければならないであろう。それができるようになったとき、ボランティアは、ほんとの意味で博物館活動の共働者として独り立ちできることになると思われる。



ボランティアによる首里、那覇港図の解説
(Volunteer Guide on bird's view of Shuri and Naha area)

[脚注]

注（1）シンポジウム「新しい世紀を目指す博物館」『博物館研究』No.294号
注（2）FREEMAN TILDEN, INTERPRETING OUR HERITAGE, NATIONAL PARK SERVICE, at 8P (1957)
注（3）EDWARD P. ALEXANDER, MUSEUMS IN MOTION, AASLH PRESS, at 195~196p (1979)

注（4）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3 at 196~210P

注（5）「沖縄県立博物館年報」No.26、1993年、41P

注（6）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3, at 215P

注（7）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3, at 215P

注（8）ALISON L. GRINDER and E. SUE McCOY, The GOOD GUIDE, IRONWOOD PUBLISHING, at 12p (1985)

注（9）EDWARD P. ALEXANDER, Supra note 3, 227P

注（10）BARBARA FLEISHER ZUCKER, CHILDREN'S MUSEUMS, ZOOS AND DISCOVERY ROOMS, GREENWOOD PRESS (1987) に出てくる子供博物館、ディスカバリー・ルームの設置の数を1990年代、1980年代、1970年代、1960年代、1950年代、1940年代、1930年代、1920年代、1900年代、1800年代ごとに集計していくと、子供博物館は1970年代に、ディスカバリー・ルームは1980年代に急増してくるのが分かる。

注 (11) ALISON L. GRINDER AND E. SUE McCOY, Supra note 8 , at 57P

注 (12) JOURNAL OF EDUCATION, Number 4 , Volume 7

注 (13) STAFF ORIENTATION BOOK, at 21P

この資料は、国立アメリカ歴史博物館で採用された新しい職員や研修生のために準備されている内部資料だが、発行年度の記載はない。

注 (14) 質問づくり、調べ学習というパターンは、その後の“竿ばかり”の解説勉強会でも継続して進めている。